

[ちくほう地域研究]

昭和二八年 北九州や筑豊の大水害を撮った人々の記憶

筑豊地域研究会会員
北九州大水害を記録する会会員
末永 裕貴 守
久門

はじめに

第1章 同時進行した河川の氾濫と山津波

四日間で一〇〇〇―五〇〇ミリの豪雨

つきまとう人為的な破堤

第2章 被災地の写真を撮った住民たちの証言

実は、小舟の下にトラックが…

井上博文さん

顕彰碑の、あの高さまで水が

末廣稔・恵美子さん

同好会が残した記録写真

松尾清照・正典さん、上野昭治さん

棺を運んでいるのでは、と思った私

山田禮次郎さん

ふるさとの橋を襲う激流

権信吾さん

立ち上がった福岡県出身の学生たち

佐伯博史さん

第3章 「記録する会」からの提案

変わらない避難率

ご近所避難のススメ

おわりに

はじめに

ここ数年、だれもがしばしば自然の猛威を感じるようになった。地震、津波、火山の噴火ばかりでなく、大型台風、季節ごとの降水・降雪もこれまでに経験したことのない量を各地で記録し、甚大な被害をもたらしている。豪雨については地球温暖化の影響が顕著である。これからますます増えるであろう大雨災害から身を守るにはどうしたらいいのか。答えを得るには、過去の被害に学ぶべきと考え、私たちは昭和二八年六月に北部九州を襲った「西日本大水害」の資料・証言収集に取り組んでいる。活動を通して、貴重な被災写真撮った人々と出会った。遠賀川流域の筑豊地域と北九州市内の計七人（うち二人は故人、一人は匿名希望）である。半世紀以上前の被災時は高校生、大学生、若い写真愛好家であった。後世に大災害の実相を伝えようと懸命にシャッターを切った人々を、写真と本人もしくは関係者の証言とともに紹介する。

第1章 同時進行した河川の氾濫と山津波

・四日間で一〇〇〇―五〇〇ミリの豪雨

いまから六〇年余り前。まだ戦後の混乱が収まらず、山野や河川も荒廃していた昭和二八年六月二五日から二八日にかけて、北部九州五県と山口県地方が梅雨前線による大雨に見舞われた。狭い範囲で北上しては南下する前線の影響で豪雨域が微妙に変化し、二六日には早くも熊本県の白川、福岡県の筑後川、遠賀川が相次いで氾濫、流域に大きな被害が出た。二七日か

ら二八日にかけての豪雨では、すでに大量の水を含んでいた山間地で山崖崩れ、土石流が多発し、「山津波」と呼ばれた。

この四日間の総雨量は、旧門司市（北九州市門司区）の小森江浄水場で六四六・一ミリ（二八日は三九八・三ミリ）、白川の上流域・小国（熊本県）で九八四・六ミリ、筑後川の中流域・久留米（福岡県）で五五五・三ミリ、遠賀川の源流域・英彦山で六二〇・五ミリだった。このほか福岡六二・四ミリ、小倉五四三・六ミリ、八幡四九九・七ミリ、田川五一二・六ミリ、直方五七〇・〇ミリで軒並み五、六〇〇ミリの降雨となった。一時間雨量も旧小倉市の到津（小倉北区）では二八日午前中に一〇一ミリが観測された。（以上の雨量は『門司市水道被害実況』『昭和二八年六月熊本気象月報』『福岡県水害誌』『西日本豪雨水害写真集』などから抽出）

土木学会西部支部がまとめた『昭和二八年西日本水害調査報告書』の九州各県と山口県の被害状況は、人的被害が死者七九二人、行方不明二三六人計一、〇二八人、負傷者一一、四二一人。家屋被害は全壊・流失・半壊が計三二、九七五戸、床上・床下浸水は合わせて四七四、〇八三戸。田畑や道路、橋梁、堤防などの決壊、損壊も目立ち、被災者総数は約二七三万人。うち福岡県は死者・行方不明二九七人、負傷者五、五八七人。家屋の被害二二万戸となっている。

平地の濁流・浸水被害に対して、山津波被害が際立ったのが旧門司市であった。死者一三九人、行方不明四人の犠牲者が出たがそのほとんどが圧死、埋没死だった。山崖崩れは六二〇ヶ所、家屋被害は一四、三二七戸にのぼり、全戸数（二六、三三九戸）の五四・四％であった。白木崎（現門司区葛葉一丁目・

風師一丁目の一部)では西鉄電車線路の山側にあった日本セメント社宅や民家が岩石や土砂で一瞬にして埋まり、四五人が亡くなった。清滝辺りでは清滝川を岩石、土砂が流れ下り、泥流は国道三号線、鹿児島線を越えて港湾、海峡まで達した。関門鉄道トンネルも水没した。トンネルの上下線が開通したのは七月九日、復旧に二日間を要した。旧市内の基幹交通だった西鉄電車北九州線の完全開通は七月二十五日であった。

・つきまとう人為的な破壊

筑豊地域を流れる遠賀川本流の堤防決壊は旧植木町(現直方市)中ノ江で六月二十六日午前一時五〇分ごろに発生し、決壊の長さは二八日には約一八〇メートルに及んだ。あふれ出る濁流は植木町から隣接の剣町(現鞍手町)を経て古月村(同)を抜け、中間町(現中間市)底井野から遠賀村(現遠賀町)方面に押し寄せ、遠賀村では地域の八割が浸水し、あちこちで水深が三メートル前後に達した。

わが国の石炭エネルギーの半分近くを生産していた筑豊で、「母なる川」が決壊したのである。国会でも問題となり、「鉱害によるものではないのか」との指摘がなされた。内閣総理大臣答弁書(昭和二九年二月二四日付 鳩山一郎首相)は、概ね次のように述べ

① 地下四〜五メートルの所に透水性の高い砂層が存在し、たび重なる出水で砂層の透水性が高まり、さらに堤外地に存在した池の底が砂層に達していたことから、破壊地点においては河水が砂層を伝わって堤内法尻(ていないのりじり)注・堤防の陸地側の面と道路面などの水平な部分とが交わる(ころ)に漏水し決壊したものと推定される。

② 鉱害による地盤沈下は認められるものの、当該箇所の採炭現場は地下五〇〇メートル以上に及ぶ深部にあり、その採炭跡も四〇％程度の充填を行なっている(ころ)で沈下は極めて緩慢に進行している。また特別鉱害復旧工事完了(昭和二五年三月)後の地盤沈下量は〇・二五メートル程度でメートル以上沈下した事実は認められない。破堤の原因は鉱害による地盤沈下ではないと推定している。

直方市植木には堤防決壊の様子を目撃した人たちがいる。当時の新聞はその様子を伝えている。にもかかわらず、現場より下流域には「右岸には、大きなヤマ(炭鉱)があった。大ヤマを守るため、田畑の広がる左岸の堤防を切った」という人為的な破壊説が今も語り継がれている。

このような「うわさ」が消えない背後には、非常手段として破壊作業が行われていた事実があるからであろう。中間市が保存しているファイル「災害の記録」に「昭和二十八年六月二十六日 遠賀川堤防決壊の被害」と題された報告書(二七ページ)が綴られており、「黒川堤防人工決壊で被害香月農民二百名が来襲」の項目に、注目すべき記述がある。

(連日の豪雨でかつてない増水のため、土手の内の堀川水門では製鉄(注・八幡製鉄所)の水道管を洗うまでに氾濫し、水門をぶち破らんとするまで満水するに至った。これがため事態を憂いた新市、唐戸、屋島方面の川東の町民は大挙して現場にはせつけ、緊急の措置として大隈炭鉱へ通ずる道路を決壊して水門への水当りを避け遠賀川へ直接放流させた。これによって昭和町、唐戸帯が泥海と化す危険から救われた)とある。

この非常手段で、(黒川の水は遠賀川へウズを巻

て奔流したが、笹尾川の水は返って上流し押し上げた形となったため、廿九日にいたり香月の楠橋方面、木屋瀬の雁田方面は水が引かず、むしろ増水する現状であった。これに激昂した香月、木屋瀬の町民約二百名が午前十時半、ゴッタ返し(ころ)の中間町役場におしつけてきて)抗議した。当時の助役は(町の責任において行った緊急措置である)と語っている。流域の切羽詰まった様子を生々しく伝えている。

第2章 被災地の写真を撮った住民たちの証言

このような大災害のさなか、未曾有の体験を後世に伝えなければ、とカメラを持って行動した一般の人々がいた。「記録する会」では、そんな「画像の記録者」七人を知ることが出来た。井上博文さん(遠賀町)、故末廣稔さん(遠賀町)、故松尾清照さん(直方市)、山田禮次郎さん(小倉北区)、樺信吾さん(八幡東区)、佐伯博史さん(若松区)、匿名希望男性(小倉南区)である。この章では匿名希望者を除く撮影者、関係者の写真を証言とともに紹介する。

↑実は、小舟の下にトラックが… ↓ 井上博文さん 遠賀郡遠賀町遠賀川在住の井上博文さん(昭和九年生まれ)は、当時、大学一年生。生家は車力や馬車もつくる金物・建材店で、父親にカメラを買ってもらい、高校時代から写真部に属していた。

決壊地点の中ノ江からあふれた濁流が「井上金物店」のあった村(当時)の中心部へ到達したのは二時間くらい後であった。やや遅いのは国鉄(同)鹿児島線がせき止めたことによる。やがて線路を超えた濁水が滝のようになって襲ってきた。鉄筋コンクリート二階建ての母屋を兼ねた店舗や作業場、倉庫など一階部分は瞬く間に浸かり、商品や材料の大半が流された。

井上さんの記憶

異様な光景を驚きながら二階から見ていた時です。父親の飲み友達が屋根越しに飛び移って来ました。その瞬間、東隣の家が押し流されてしまったのです。その家は遠賀郵便局の局舎に当たってつぶれてしまいました。鬼怒川の堤防決壊（茨城県常総市＝平成二十七年九月）をテレビで見ましたが、川からあふれる濁水で家が次々と破壊される様子に、六〇年余り前のあの日がよみがえり涙が出ました。大水が来た後、近所の五、六人がうちへ避難しました。



写真1 浸水地域を進む新聞輸送の小舟。水面下にトラックが…（井上さん撮影）

水害の時の写真は五枚残っています。三枚は六月二七日に撮りました。新聞社の小舟が販売店へ新聞を届けていました（番号①）。舟上に「西日本新聞」と書かれた旗が見えます。でも、それだけじゃないんです。実は、この小舟のすぐそばにカマスを積んだ運送会社の二トン積みトラックが水没しているんです。こんなことは写真を撮った者しか知らない事実ですよ。ね。

屋根に二人の男性がいる写真（番号②）は、母屋の屋上から撮影しました。二人とも避難していた近所の方です。後方は村役場です。玄関のひさし近くまで水が来ていますよね。あの大水害の時は、急上昇した水位が一度少し下がり、後半の大雨で再び上昇しました。うちあたりでも水深は最大で三メートルに達したと思います。

米や石油コンロ

は二階に上げていたので「めし」には困りませんでした。それに流れてくるトウシヤク（いなこずみ）の上にいるニワトリを捕まえてはコンロで煮て食べました。飲み水には苦労しました。北東に一キロメートルくらい先の広渡の高台にあった長岸寺まで水をもらいに行くのです。何しろボートを漕いで往復するのですから。本当に大変でした。ね。



写真2 屋根の上にいる近所の人たち。後方は遠賀村役場（井上さん撮影）

↑顕彰碑の、あの高さまで水が↑末廣稔・恵美子さん（遠賀郡遠賀町旧滞在の末廣恵美子さん（昭和三年生まれ）の父、稔さんは当時、遠賀川駅の信号所に勤務していた。「その頃の遠賀川駅は鹿児島線、室木線、芦屋線が合流しておりポイント切り替えなど信号所の仕事は忙しかった。当日の夕方、家族は避難列車で折尾へ向かい、折尾や若松の親戚宅で一カ月半近く過ごした。自宅に残った父は長い間、跡片付けに余念がなかった」と恵美子さんは語る。その父の撮った写真五枚が恵美子さんの手元にある。一枚には（昭和28年6月26日遠賀川決壊による水害状況 6月29日寫）と記され、家の近くにある柴田直敏翁（注・明治一五年、二四年に遠賀川の堤防が決壊し、地元の広渡地区に大きな被害が出た際、租税減額や水路の整備に尽力した）の顕彰碑付近の状況が写っている（番号③）。この石碑は今も同じ場所にある。

恵美子さんの記憶 私の家はずっと遠賀川の小さい

支流の島田川ぶちにあり、洗い場のような所に杭を立て小舟をつないでいました。川沿いの家は牛馬か、それぞれ小舟を持っていて、肥料を運んだり、苗を運んだりしていました。川を上手に利用していたのです。



写真3 決壊から3日後。旧停1丁目の顕彰碑付近の様子（末廣さん撮影）

六月二六日の昼ごろでしたか「植木の方で堤防が切れた！」と言う話が伝わってきました。私は急いで一歳の次男を背負い、三歳の長男の手を引き二五〇メートルくらい離れた遠賀川駅近くの母の実家へ避難しました。駅付近の地盤は高くなっており、更に実家は一段と高くなっていたので、ここなら大丈夫と思っただけです。水はまだ来ていませんでしたのでお米を取りに家へ戻りました。家にあつた米缶、これは一抱えくらいのブリキ製の円柱の缶で、すっぽりと蓋を被せるようになっていますが、これを引きずったり、押したりして四、五軒先まで進んだとき、島田川の鉄橋から一気に、ドーンと水が押し寄せて来ました。またたく間に足が着かなくなるくらい水かさが増し、体が浮いたので泳ぎながら米缶を押しして旧三号線へ出ました。この写真（番号④）は駅前から旧三号線に向かって撮っていますね。正面の建物は旧郵便局ですが、当時はすでに郵便業務はしておらず、一階は肉屋さんに貸していました。

私は島田川と共に育ち暮らして来ましたので、水害に遭っても、川には愛着があります。また川や水の

切さは日ごろから感じています。川の恵みを大切にしてくれから生活して行きます。

↑同好会が残した記録写真↑

松尾清照・正典さん、上野昭治さん

犬鳴川は遠賀川の支流である。二つの



写真4 遠賀川から見た駅前通り。中央の建物は旧郵便局 (末廣さん撮影)

流れは直方市植木で一本になる。合流地点にほど近い犬鳴川左岸に古刹「真如寺」(松尾正典住職・昭和一八年生まれ)がある。このお寺には計五五枚の大水害写真が保存されている。写真は一冊のアルバムとB四サイズ用の紙に貼り込まれており、平成二七年六月に直方市で催された「水害展」で公開され、写真のデジタルデータは防災活動に役立たせる目的で、お寺から遠賀川河川事務所や直方市などへ寄贈された。

(1959年12月31日)と制作年月日の記されたアルバムの写真は正典さんの父で先代住職、清照さん(大正三年生まれ、昭和四一年逝去)と仲間の「写真同好会」会員が撮った。正典住職は「うちは中ノ江の堤防決壊地点からは約二キロメートル上流になるため、被害は軽微だった。父は公民館長や消防団の副団長をしていたので、あの大雨の際はカメラをもって出かけたまま、何日も家に帰らなかった。写真は被災した方々が後世へ残してください」『地域の財産』だと思っている」と語る。決壊現場、救助活動、避難した人々や家畜の様子などが含まれ、資料価値が高い。堤防決壊を目撃した元高校教諭、上野昭治さん(昭和

一四年生まれ・直方市頓野)は真如寺のアルバムを見ながら次のように語った。

上野さんの記憶 思い出すのは、専業農家だった家族(一〇人)が必死で片付けに精を出していた姿と、復旧作業中の堤防で仲間と遊んだことです。

水害後は飲み水を確保するため、家族で井戸の掃除をしました。深さは三メートル以上あったでしょう。私ははしごをかけて中に入り、井戸の内壁をたわしで何度も洗い、泥水をくみ出しました。水が澄んできたところで父が買ってきた「さらし粉」を入れ、消毒するのですが、これを入れると二三日は飲めません。この間は仮設の給水車(番号⑤)などに頼っていたのではないかと思います。

堤防の復旧工事は、河原から堤防の切れたところまでトロッコの線路を敷き、洪水で堆積した泥や土を運んでは埋めていました(番号⑥)。そのトロッコは一〇〜二〇両くらい連結されて、小型のディーゼル機関車が引いていました。私たちは、工事が休みでもれもない時など、トロッコを堤防の上に引き揚げ、河原へ駆け下った。決壊で出来た溜池で泳いだりしてました。大水害から四、五年たって父親が三輪トラックを買い、自分たちで山の土を運んで、水害に備えて地上げしました。本当に大仕事でした。



写真5 伝染病の発生を警戒して急造した植木町の給水車 (松尾さん撮影)

↑棺を運んでいるのではなく、と思った私↑

山田禮次郎さん 北九州市小倉北区在住の山田禮次郎さん(昭和二年生まれ)は、あのころ門司港で、父親が経営していた海運会社を手伝っていた。趣味にしてきた写真撮影の技術を見込まれ、



写真6 決壊した堤防の締め切り作業現場。後方は木屋瀬方面 (松尾さん撮影)

当時門司市助役だった柳田桃太郎氏(後に門司市長、衆議院議員)から父を通して「中央官庁へ報告したり、現地視察に来る大野伴陸国務大臣に被害状況を説明したりするための被災地の写真を撮影して欲しい」と依頼があり、昭和二八年六月三〇日から七月三日までの四日間、同市の北西部を自分のカメラで撮った。ネガは全部で八八枚あり、保存状態が良く、現在も鮮明に焼き付けが出来る。

山田さんの記憶 私が住んで居た砂利山のふもとでは、山腹崩落や土石流で大きな被害が出ましたが、我が家は軽微な被害で済みました。写真撮影の依頼は被災した翌日(二九日)にあり、土砂やがれきを乗り越えながら二キロメートルくらい離れた広石町の門司市役所へ出向いてフィルムを受け取り、撮り始めました。どこもひどい状態で、電車、バス、汽車は止まり、土砂や岩石、倒壊家屋などで自転車も走れません。歩き回るほかはなく、撮影範囲は限られました。ともかく急ぐ写真なので、現像は自宅ですべて、記録性に優れたものを選んで自分で四つ切りサイズに焼き付け、それを翌朝、市役所へ渡し、新しいフィルムをもらっ

て、また、すぐ撮影に出かけるという状態でした。

そのような中で最も心に残っているのは、桜トンネルで写した、棺らしきものを運ぶ人たちです(番号⑦)。場所は桜トンネル(注・門司港地区と新門司をつないでいる隧道)の門司港側です。岩石でほとんど閉ざされ、除去作業は難航していました。そこで長い木箱を運んでいる人たちに会いました。私は夢中でシャッターを切りました。ただ、その方たちと言葉を交わしたわけではありませんし、何を運んでいるのか確かめてもいませんが、亡くなった方を納める棺では、と思ったものでした。



写真7 「棺桶を運んでいるのでは」と思った——桜トンネルの吉野町側(山田さん撮影)

門司倶楽部西側の坂道で写真を撮っていると、冠水した布団から綿を、水道水で洗いながら取り出している女性を見かけました(番号⑧)。風師山の山津波で河原と化した道路に、共同の給水設備を設置したもののようでした。この近くにもう一か所、給水設備があり、そこでも洗濯をしていました。写真が災害の実相の継承にお役に立つのなら、こんなうれしいことはありません。

↑ふるさとの橋を襲う激流↑

榊信吾さん

関門海峡に注ぐ板櫃川の上流は地名そのままに「大蔵川」と呼ばれている。源流域は官営八幡製鉄所時代に建設された「河内貯水池」である。石造りの重力式

ダムや通称「めがね橋」はそれぞれ近代化産業遺産、重要文化財に認定、指定されている。八幡東区大蔵二丁目に住む榊信吾さん(昭和一年生まれ)は、大蔵生まれの大蔵育ち。酒店経営。童話の創作や作詞にも取り組む。ふるさとの川への思いは格別で、地元のアマチュア歌手「大蔵川の四季」も作詞した。



写真8 水に浸かった布団から綿を取り出している女性(山田さん撮影)

水害の時は高校三年生。中学生のころ家業を手伝って貯めたお金で念願のカメラを手に入れて以来、写真撮影のとりこになっていった。いわゆる「二八災」の当日、雨脚が強くなった昼ごろから水が引き始めた夕方近くまで、歩いて行ける範囲の状況を撮った。手持ちの六枚の写真は全て被災当日のものである。

榊さんの記憶

あの日は日曜でした。店の前は土囊を積みましたが、大蔵川沿いになる裏手からどんどん

家が水が入って来るようになりました。父親から、知り合いがいる近くの園田社宅(旧八幡製鉄所社宅)へ避難するように再三言われ、せかされて仕方なく、手土産に店から赤玉ポトワインを取り出し、行こうとしました。しかし、気乗りしません。「どうにかなるわ」とピンは棚に戻し、長靴にゴムかっぱという出で立ちでカメラが濡れないように抱きかかえ、外へ飛び出しました。この様子を写真に残しておきたい、という気持ちが強かったのです。

まず大蔵川上流に向かい、私が通っていた八幡高

校横の道端から激流の様子を撮影しました(番号⑨)。写っているのは「景勝橋(けいしょうばし)」。流木が大量に橋げたに引っかけ、水がせき止められ、あふれていました。このよう



写真9 濁流に洗われる大蔵川の景勝橋(榊さん撮影)

な大蔵川は初めて見ました。正面は「溝上酒造」の建物です。煙突はなくなっています。その左側の建物は今もそのままです。

続いて川に沿って下り、神田町にあった神田市場前の商店街(番号



写真10 大蔵川左岸にあった神田市場や神田商店街(榊さん撮影)

⑩)に来た時は、少し雨が収まったところで水位は〇・五メートルくらいだったでしょうか。当時の神田商店街は五三店舗、神田市場は左岸にあり肉屋、果物屋など一五・六店舗が入っていましたが、新しく道路が出ることに伴い、北側の現在地(大蔵橋のたもと)へ移転しました。さすがですね。河内貯水池の堰堤(えんてい)は何ともありませんでした。大水害の後、川は何度か改修され、幅も深さも二倍くらいになり、おかげで心配はずいぶん減りました。

↑立ち上がった福岡県出身の学生たち↑

佐伯博史さん

〈新聞、ラジオによる報道は全国各地の同情をあつめ、6月末にはすでに義捐金及び救恤品が到着しはじめ〉(『昭和二十八年六月 福岡県水害誌』から)

未曾有の大水害に対し、全国各地から温かい支援が被災地へ寄せられ始めたころ、北九州市若松区在住の佐伯博史さん(昭和七年生まれ)は東京の大学の三年生。七月に入るとすぐ福岡県人会東京本部が県出身学生に義捐金集めを呼びかけた。佐伯さんら呼び掛けに応じた約四〇人は七、八人で一班を編成し、人通りの多い街頭に立った。

街頭での活動に欠かせなかった東京都の募金活動許可証と鍵のかかった募金箱、身分証明書、それに被災状況を紹介する新聞紙面や写真を貼ったパネルは福岡県東京事務所が用意した。佐伯さんは中学時代からラジオの組み立てを趣味にしており、確かな技術は近所でも評判になり、大学時代は製作したラジオを販売して二眼レフカメラを買ったほどだった。このカメラで募金活動も撮った。平成二五年四月、隣家から出火した火災で自宅が

全焼したが、原画一五枚を貼ったアルバムだけは佐伯さんが炎の中から持ち出した。

佐伯さんの記憶

私たちの班は乗降客が行き来する東京駅の八重洲口(番号⑩)や、ラジオ放送、映画



写真11 再開発が行われていた東京駅八重洲口での募金活動(佐伯さん撮影)

の『君の名は』で一躍有名になった数寄屋橋(番号⑫)の街頭に何度も立ち、メガホンを両手で持つて、朝から夕方五時

か六時ごろまで「被災者救援にご協力ください」と声をからしました。ボランティア活動でしたが、昼食だけは出ま

が、募金箱へ次々と十円札や五円札が入りました。まだお金もなければ食べ物も十分出回っておらず、困ることの方が多かった時代に、通行する人たちは九州、福岡県のことを心配してくれましてね。街頭へ出始めは「助けてもらって当然」と言う気持ちでしたけれども、日に日に感謝の念が深まり、生きた社会勉強をしました。

その日の募金活動が終わると、派出所へ寄り、警察官立会いで募金箱の鍵を開け、みんなでお金を計算して、警察の方に金額を指定用紙に記入してもらい、その紙とお金を持って県人会本部へ帰っていました。募金箱やパネルは派出所が預かってくれました。二週間くらいで募金活動は終わったと思います。目標額を大きく超えた善意が寄せられたと記憶しています。

第3章 「記録する会」からの提案

・ 変わらない避難率

わたしたちの「記録する会」は平成二四年八月に発足した。目的は三つだ。▽暮らしに役立つ「防災・減



写真12 数寄屋橋上で募金活動をする学生たち(佐伯さん撮影)

災の知恵」を探し出し、後世へ伝える▽災難の避け方、恵み多い自然(山・川・海)との付き合い方を学び取る▽活動を通して人と人のつながりを強め、地域づくりに貢献する——である。まだ三年余りだが、北九州・筑豊地域の住民や官庁、公共施設などから提供された写真・ネガは五〇〇枚を超え、貴重な関係資料も二一点収集した。これらの一部は平成二五年、四か所で「北九州大水害写真展」として公開し、同時に体験・継承のつどいも計五回開催した。翌二六年は二月に門司の松ヶ江南市民センター、六月には八幡図書館、十一月には遠賀町中央公民館で「遠賀町女性防火・防災クラブ」と協力して写真展やつどいを開催した。平成二七年は六月に直方市の遠賀川水辺館で、十一月には昨年引き続き遠賀町中央公民館で同クラブと協力して水害展やつどいを行なった。

被災体験者はこれまで二六人に面接し、うち二人の聞き書きをまとめた。面接で判明した重要な事実は二人を除いて避難が遅れたことである。安全な建物から危険な自宅へ向かい、災害に巻き込まれた小学生(当時)も三人いた。

あの災害から六〇年余り。信頼度が低かった気象予報は正確度が飛躍的に高まり、情報伝達を担う各種メディアの発達は著しく、パソコンさえあれば、刻々と変化する雨域や雨量、河川の水位などのデータを各家庭でも簡単に入手できる時代を迎えている。しかし、「避難遅れ」はまったく変わっていない。

平成二六年九月二日の西日本新聞は「避難勧告 住民腰重く 九州、退避実数一%未満」という記事を掲載した。この記事は九州七県で雨の多い四月から八月にかけて出された避難勧告に対し、住民がどう行動したかを分析したもので、避難した人の割合は、例えば鹿児島県〇・六%、熊本県は〇・九%。福岡県

は（八月二日、筑紫野市や大野城市など五市町村の一万二六八二人に避難勧告が出されたが、午前九時時点で避難者は一〇五人だった」としている。計算すると避難率は〇・〇九%と極端に低くなる。

避難率が低い背景には、多少の災害では崩壊しなくなったマチづくり、ムラづくりがある。河川改修や強固な堤防、防災ダムなどの建設で地域の安全性は高まった。それぞれの住宅も頑丈な造りになった。けれども、これが「まだ大丈夫」「自分だけは助かる」という「正常性バイアス」を助長している面も見逃せない。

・ご近所避難のススメ

そこで、私たちは「避難遅れ」「高齢化」「気象の激化」を念頭に、次のような提案をまとめた。大半が暮らす都市圏での大規模な豪雨災害を想定している。

【ご近所避難・近距離避難】頑張れば自分で歩いて行ける一〇〇メートル、二〇〇メートルの範囲で、避難場所を探しておく。

【一時避難・分散避難】おせいが一か所にかたまらず、七、八人の少数が寄り合い、励まし合って、危機的な状況を乗り切る。自宅被害が大きければ機会をうかがって公設の避難所へ移動する。

【複数移動・連帯の心】首から提げた袋に財布と健康保険証を入れ、空いた手で友人知人、幼児、耳や目、手足の不自由な人たちの手を握る。

【自己抑制と謝礼の原則】年寄りだからといって、わがままは言わない。ご近所避難先へはきちんとお礼をする。

【生き抜く力】「自分が助かれれば他人も助かる」と強く自分に言い聞かせながら行動し、避難場所へ向かう。

若干の説明を加えると、高齢者やほとんどの障害者

は、路面を雨水が流れだしたら、極めて移動が困難である。ツエ、シルバーカー、車いすも使えない。となると、ぼつりぼつりとしかない自治体指定の予定避難所まで自力で行ける人は限られてくる。であれば「避難遅れ」を見越して、近いところに緊急の小型避難所を住民の力で確保しておいた方が利口である。学校法人、社会福祉法人、宗教法人、大型商業施設、マンションや高層アパート併設の集会所などである。試しに「記録する会」が各施設（強固な三階建て以上）へ打診すると、「何時でもどうぞ」「少人数であればOK」と拒絶は一件もなかった。

住民が自力で「ご近所避難」をすれば、その分、救助のプロ（消防、警察、自衛隊、海上保安部、国・自治体職員、防災関係諸団体職員ら）の技と機材と人材を社会的弱者の対応へ回すことが可能になる。「自分が助かれれば他人も助かる」の合言葉には、率先避難に加えて、こんな効果も見込んでいる。

避難場所については「六メートルの高さ」「鉄筋コンクリート造り」を付け加えて語っている。例えば小倉北・南区の場合、昭和二八年災害でもおおむね海拔六メートル以上の地点で浸水地域はなかった（丘陵の内水氾濫は含まない）。私たちの入手した資料で判明した最大浸水地は遠賀町島門地区の水深三メートルである。しかし、近年の時間雨量はかつてを大きく上回る。各地の流域浸水想定値も高まっており、低地では水深五メートル以上すら考えなければならず、土石流や泥流の発生を併せて気遣えば、おのずと「強固な三階建て以上」になってくるのだ。

それぞれの「避難力」を高めていく方策として、「記録する会」は「被災体験継承のつどい」を提唱し、すでに計一か所で実施し、ことしも小倉北区の寿山市民センターなどで予定している。前半で会の収集した

写真をスライドで見てもらって、被災体験者の話を聞き、後半が専門家による防災ミニ講座となる。時間に余裕があれば実話型の紙芝居を組み込む。いずれにしても画像と証言で被害の実相をよく知ってもらうことに力を入れている。「避難遅れ」を引き起こす真因と言えそうな「自然観」のゆがみにも触れている。

おわりに

「天災は忘れた頃来る」――。大災害が発生するたびにあちこちで用いられる警句である。この警句を作ったのは物理学者で文学者だった寺田寅彦（一八七八―一九三五年）とされている。ただ、各種の災害が多い日本列島で、わたしたちがいにしえから忘れっぽかったかというところではない。寺田自身が代表的な随筆「天災と国防」（昭和九年）で（昔の人間は過去の経験を大切に保存し蓄積してその教に頼ることが甚だ忠実であった。過去の地震や風害に堪へたやうな場所にのみ集落を保存し、時の試練に堪へたやうな建築様式のみを墨守して来た）と書いている。

寺田はこうも指摘している。（いつも忘れられ勝な重大な要項がある。それは、文明が進めば進む程天然の暴威による災害がその劇烈の度を増すといふ事実である）（文明が進むに従って人間は次第に自然を征服しようとする野心を生じた）（いやが上にも災害を大きくするやうに努力してゐるものは誰であらう文明人そのものなのである）（いずれも「天災と国防」から）

彼は二〇世紀だけでなく二一世紀も見通していたと言わねばならない。寺田が没して八〇年で、私たちは地球温暖化による気象の激烈に直面し、解決策を見いだせずにもがき、事態の深刻化におののいている。災害に備えた新しい地域づくりや住民それぞれの真の避難力は、過信やおごりを排した自然との共生の思想か

ら生まれてくるのではあるまいか。

最後に、被災写真の収集、被災体験者の聞き取りや現地調査、関連資料の発掘などに携わった方々へお礼を申し上げて、報告を終わりたい。

▽遠賀町の井上博文さん、末廣稔・恵美子さんの写真に関する調査、聞き取り等はすべて「遠賀町女性防火・防災クラブ」の会長神陽子さん、会員萩本悦子さん、鈴木文代さんたちと「記録する」会が合同で実施した。

▽松尾清照さんらの「真如寺に伝わる写真」については、地域史研究者牛嶋英俊さん(直方市)から情報をいただき、聞き書きのまとめ等は筑豊地域研究会代表、宮嶋玲子さん(飯塚市)へお願いした。

▽樺慎吾さんの写真の撮影位置確認や聞き書きのチェックなどは「記録する会」会員、佐々部享二さん(北九州市小倉北区)が行った。

▽佐伯博史さんの証言及び写真に関する東京での現地確認と写真撮影、関連資料の収集は「記録する会」会員、村松正さんと村松綾子さん(北九州市小倉北区)が担当した。

主な参考文献(書名・題名、編集者もしくは発行者、発行年月の順)

▽『昭和二十八年六月 福岡県水害誌』福岡県 昭和二十九年一月

▽『昭和28年西日本水害調査報告書』土木学会西部支部長 昭和三十三年二月

▽『昭和28年6月末の豪雨による北九州直轄5河川の水害報告書』建設省九州地方建設局 昭和二十九年三月

▽『昭和28年7月 西日本豪雨水害写真集』福岡県

昭和二十八年七月

▽『昭和28年6月 熊本気象月報』熊本測候所

▽『昭和28年6月28日 豪雨水害写真集』門司市役所 昭和二十八年八月

▽『昭和28年6月28日 大水害写真グラフ』小倉市役所 昭和二十八年一月

▽『昭和二十八年 八幡水害誌』八幡市長 守田道隆 昭和三十一年一月

▽『昭和28年 北九州大水害写真集』北九州市役所 昭和二十九年三月

▽『小倉市消防署沿革簿』小倉市消防本部 昭和二十五年二月～昭和三十六年四月

▽『昭和二十八年六月発生 遠賀村災害誌』遠賀村役場 昭和二十九年一月

▽『昭和二十八年六月 中間町災害被害状況資料』中間町 昭和二十八年九月(推定)

▽第二回国会答弁書 内閣総理大臣 鳩山一郎 昭和二十九年一月二四日

▽『天災と国防』寺田虎彦 岩波新書版 昭和二十三年二月

▽『北九州大水害を記録する会』会報(一～三三三号) 平成二十四年～平成二十八年